

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	22222003	研究期間	平成22年度～平成26年度
研究課題名	人種表象の日本型グローバル研究	研究代表者 (所属・職) (平成28年3月現在)	竹沢 泰子 (京都大学・人文科学研究所・教授)

【平成25年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○ A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
<p>(意見等)</p> <p>本研究は人種表象を分野・地域横断的に研究するもので、手法はセミナー、国際会議等を頻繁に開催して行う共同研究である。会議等の開催は活発で、報告書等も十分に出版されている。また、文理融合面も含むアジアからの情報発信が有効になされている。</p> <p>この種の共同研究では、各論・総論ともに議論を通して進展することが期待される。各論の蓄積には見るべきものがあるが、「統括的理論」の構築として研究目的に据えられている総論部分の理論は、本研究期間中に大幅に進展させ各論に反映させることが望ましい。関連して、国際的有力雑誌への掲載の増加も望まれる。</p> <p>研究の進展に伴う研究組織の改編は評価できるが、その理論的基礎の強化も必要である。</p>	

【平成28年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待どおりの成果があった。
A	当初は、人種をめぐる視覚表象、非視覚表象、科学表象、自己対抗表象というように分節化されていた研究目標は、非視覚表象へ重点を移動し、より具体的な焦点化が図られ、さらに研究組織の見直しがなされたことにより、新研究組織において当初目標に対して期待どおりの成果が上げられた。
	具体的な焦点化によって「混血」という人種化が主題として浮上し、自己対抗表象として日系アメリカ人の人種表象の検討及び、科学表象としてゲノム研究における基礎範疇の批判的検討が深化された。それぞれの成果は国際的な評価に付され認知を得ている。